B 138　着心地の類型化　－　夏の半袖ブラウスについて　－

岐阜女短大　　春日伸子

緒言　被服の着心地は、人間の感覚尺度によって判定される官能特性であり、それゆえにその良し悪しを決定する要因の形態は、非常に把握し難いものである。一般に、着心地を決定する要因の分類は、被服学的見地からおこなわれている場合が多い。しかしながら、着心地を判定する尺度が人間の感覚であることを考慮すると、要因の分類も人間の感覚的立場からおこなわれるのが最良であると考えられる。そこで今回、着心地に関するアンケート調査をおこない、その資料をもとに人間の感覚的立場からの着心地の類型化を試みた。尚、今回は、対象となる被服を夏の半袖ブラウスに絞っておこなった。

方法　被検者は、女子高校生58人、女子大学生14人、主婦66人、の合計138人である。調査期間は昭和55年7月上旬～8月上旬。被服の着心地に関与すると思われる要因を、まず被服学的見地から全37項目を選定し、その項目についてアンケート調査をおこない、因子分析法による解析をおこなった。

結果　解析後、因子の解釈をおこなった結果、第Ⅰ因子；季節性と生理衛生の因子、第Ⅱ因子；審美性の因子、第Ⅲ因子；身体保護と運動機能性の因子、第Ⅳ因子；布地の触感と扱い易さの因子、という4因子が表われた。また、各因子内の項目別重要度を回答率からみた場合、季節性と生理衛生の因子、そして審美性の因子においては、それぞれ清潔さ、清潔感に関する項目の重要感が大きく、身体保護と運動機能性の因子においては、寸法に関する項目の重要感が大きく、布地の触感と扱い易さの因子においては、布の硬さに関する項目が、大きい重要感を示した。